

野菜研究室ダイアリー

2025 年 9 月



○今年の残暑は本当にキツイです

連日の猛暑日と熱帯夜で、人間と野菜の両方にとって危険な日々が続きました。農業生産の現場からも、高温対策の技術を開発して欲しいという切実な要望が寄せられています。



○2025 年度産の試験の準備が佳境を迎えています

愛知県の施設野菜生産は、夏から秋口にかけて苗を定植し、冬を超えて翌年の春から初夏にかけて収穫・出荷する作型が中心です。なので、私たちの研究室でも、8月から9月に苗を植え、様々な調査をしながら育てていきます。定植前には、ほ場の準備も整えなければなりません。連日の猛暑の中、着々と作業を進めています。

9月に入ってから、研修の一環で実習に来られる方やインターンシップの大学生にも、残暑が厳しく過酷な環境の中、作業に参加していただきました。



土の中の余分な肥料分を取り除くため、夏の間、ハウスの中でソルゴー(*Sorghum bicolor*)を栽培し、刈り取って持ち出しました。重労働です！



ハウスの土を耕し、ベッドを作りました。
地面からの照り返しが強く、たまらなく暑いです！



根っこの状態を確認しながら、セルトレイで育てたトマトの苗を植えました(左)。
その後、順調に育っています(右)。



こちらのトマトは、背の高いハウスで、高い位置まで誘引して栽培します(左)。
誘引器具が高い位置にあって手が届かないので、高所作業車に乗って作業します(右)。
ハウスの中はとても暑いのですが、高い位置はひととき暑さが堪えます！



イチゴは、ランナーと呼ばれるつるに小さな株を育てて苗にします(左)。
健康で充実した苗に育てるためには、毎日のこまめな手入れが欠かせません(右)。



一部のイチゴ苗は、人工的に昼の時間を短くし、夜間冷房をかける「短日夜冷処理」で花芽を誘導します。



花芽形成は、一部の苗をサンプリングし、生長点を顕微鏡で観察して確認します。「花芽検鏡」と呼ばれます。



2026 年度に配布するフキの基核苗(営利生産のための一次種苗)を育てるため、定植の準備をしています。



イチゴ苗を定植する予定の栽培施設内外の温度を詳しく調べています。
高温対策技術を検討していく上で、重要な基礎情報となります。

○酷暑の中でも元気な植物たち

人間はもとより、植物たちにとっても生命に関わりそうな厳しい暑さが続きました。しかし、中には平然と花を咲かせる植物が存在します。特に、サルスベリ、キョウチクトウ、タカサゴユリは白眉だと思います。強すぎです。



真夏を彩る花といえばサルスベリです！



キョウチクトウもなかなかの実力者！
有毒っていうのも、またなんとも…



そして、危険なのはタカサゴユリ。可憐な花にだまされてはいけません。環境省の「生態系被害防止外来種リスト」にも掲載される台湾生まれの猛者です。



驚くほど、どこにでも根付きます！



「牧野植物大図鑑」には掲載されていませんでした。
牧野富太郎先生が見つけれないはずがないので、
比較的最近になって侵入したのかもしれません。

愛知県農業総合試験場 園芸研究部 野菜研究室